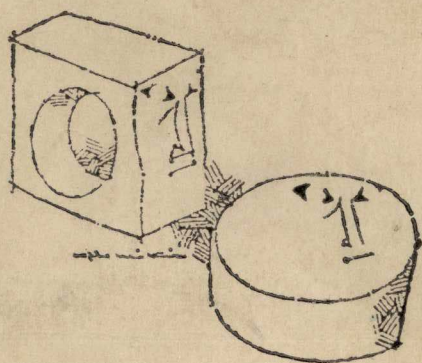


積木が

親と子の二百日戦争

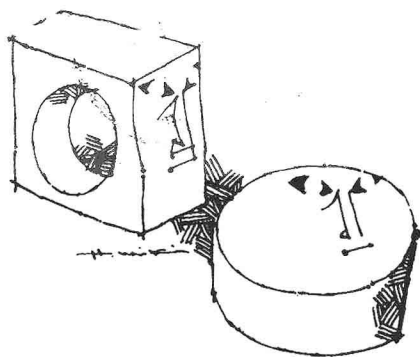


穂積隆信 著

積木が

親と子の二百日戦争

穂積隆信 著



桐原書店

著者

穂積隆信（本名鈴木隆信）

昭和六年七月二十日、静岡県伊豆に生れる。父穂積忠は折口信夫、北原白秋門下の歌人、国文学者だった。昭和二十八年俳優座養成所を卒業。新人会、新劇場を経て、現在テレビ、ラジオ、舞台で活躍中。

積木くずし

親と子の二百日戦争

一九八二年九月二十日 第一刷発行
一九八三年四月七日 第二五五刷発行

定価 九八〇円

著者 穂積隆信

発行者 山崎賢二

発行所 株式会社 桐原書店

東京都杉並区阿佐谷南三ノ四ノ三（〒一六六）

電話 〇三（三九）五二二（代表）

振替（東京）六一五五二四四

印刷 カシヨ印刷株式会社

装丁 イラスト 幹英生

落丁本・乱丁本は本社でお取替いたします。

0677-8705-1381

S84 46 (17 3 75)

女儿回来了

BG000160

荒れ狂う嵐の中で 1

一 桜田門の秋 2

由香里の生い立ち 3

第一の課題 8

二 由香里前史 16

三 闘いの始まり 37

帰らず 37

待つ 47

安らぎの場を求めて 57

一 動く点を追って 58

第二の課題 58

芥 箱 65

病人のように 73

二十時、十時 79

第三の課題 79

門限破り	85
痛み	96
街で生きる	103
一 街で生きる	104
竹江さんのやり方	104
泣き笑い	110
やさしい隣人	117
二 由香里の中へ	123
黒い日々	123
眠れない夜	128
由香里の中へ	136
明日に向かって歩く	143
一 かたつむり	144
くり返し	144
接近	154
二 兆し	166

勇み足

壁の前で

家族列車

一 悪いのは私

歩み寄り

幸せな日

真実の姿に

二 家族列車

遠く離れて

景色のゆくえ

由香里、頑張れ

私が今、思うこと

あとがき

185

175 166

186

186

192

197

203

203

212

224

231

234

荒れ狂う嵐の中で



一 桜田門の秋

昭和五十六年十月七日、日比谷公園の木々の葉は黄ばみ、皇居のお堀端にもすっかり秋の気配が漂っていた。

妻と桜田門の警視庁の前に立った私は、装いを新たにしたその近代的なビルの構えに威圧されて、足が凍む思いであった。

初めてそれを目にしたわけではなかった。私は、何度か映画のロケーションなどの仕事で警視庁の門はくぐっていたはずである。そのときは、建物など目に入らなかった。私は何のためらいもなく、胸をはって堂々と中へ入って行ったはずである。

それが、この日は、威容を誇る建物に圧倒され、門の前に直立不動の姿勢で立っているお巡りさんの視線にも、思わず目を伏せていた。

妻にもそんな私の戸惑いがわかったにちがいない。

「お父さんと警視庁へ来るなんて考えもしなかった……」
と、呟くように言った。

私と妻は娘の非行問題で、メタメタに疲れきっていた。

私、穂積隆信、本名鈴木隆信。俳優、四十九歳。妻、美千子、四十二歳。そして娘、由香里、十三歳。三人が乗り込んだ小舟は、荒れ狂う嵐の中で、完全に波にのまれて沈みそうになっていた。

私と妻は、右往左往、娘の行動に振り回され、疲れ果て、逃げ道がないままに、縄なはる一本のワラを求めて警視庁の門をくぐったのである。

由香里の生い立ち

娘の由香里は、昭和四十二年十二月十六日、東京・港区にある虎の門病院で生まれた。予定日を一カ月も過ぎた出産なのに、二千六百グラム、小さな赤ん坊であった。哺育器の中で眠る娘を見て、私は、何とか健やかに育って行ってくれることだけを願った。

それが、生後七カ月目、由香里は突然白い水を吐き出して脱水状態におちいり、虎の門病院

へ入院した。幼い真綿のような肌の由香里の両ももに、太い管を通してリンゲル液が注入された。

内臓が弱いらしく、それから、由香里の虎の門病院への入院が続く。家へ帰ったときの由香里の遊びは、人形の太ももに爪楊枝をさして、それにひもをつけて壁に這わせる点滴ごっこであった。他の遊びを知らず無邪気にやっているだけに、親の気持はせつなかった。それを見れば、妻はいつも涙ぐんでいた。

だが、健康になってほしいという親の願いもむなしく、四歳九カ月のとき、虎の門病院ですつと診ていただいていた内臓外科の池永先生に呼ばれた。

「精密検査の結果、腹部腫瘍の疑いがあります。もし、悪性だった場合は覚悟して下さい」

まだ四歳の子どもである。それが手術を宣告されたのだ。私は貧血を起こして思わず妻の腕に倒れかかった。しかも、腫瘍、悪性、覚悟という言葉聞き、私は絶望感とともに、由香里が不憫でならなかった。

病院のベッドで眠る由香里に、妻は嗚咽をこらえて話しかけていた。

「由香里ちゃん……ごめんなさい……」

私は、その妻のうしろに立って、言葉もなくうなだれていた。

幸い腫瘍は良性で、それを摘出することで、無事に退院することはできたが、術後の経過が

思わしくなく、それから、小学校へ通うあいだじゅう、由香里は虎の門病院への入退院をくり返した。

その間、どれだけ虎の門病院の先生方にお世話になったかしれない。小児科の伊東先生、尊我部先生、皆川先生、内臓外科の池永先生、そして、現在に至るまで診ていただいている吉原昭次先生、内科・社会心理学科の鶴沢立枝先生。この先生方に診ていただきながら、由香里は、病院から学校へ通うような小学校生活を送ったのである。

その頃の私は、俳優としての過渡期にぶつかっていた。俳優座の養成所を出て、新劇からテレビの敵役をスタートにさまざまな役をやっていたが、大げさに言えば、自分の芸というものを探し求めている。仕事も食欲にしたし、酒も飲んだ。由香里の世話は妻に任せっ放しであった。

今、あの頃妻が、病気がちの由香里と、ひっそり私の帰るのを待っていた状況を思うと、私は胸がしめつけられるような気がする。あるいは、遠く由香里の非行の原因をさぐるとすれば、あの頃の私の生活態度が一因だったことも事実だと思う。

麴町中学に入学すると、由香里は健康を取り戻した。中学生活が嬉しくて仕方がない様子だった。剣道部へ入って剣道にも夢中になった。妻と私は、すっかり健康を回復し、毎日登校する由香里が、そのまま元気に成長する姿を夢みて、ようやくわが家にも春がめぐって来たと喜

んだ。

ところが、中学一年も終わりに近い三月上旬のことである。由香里は、顔を剃刀のようなもので切られて帰って来た。妻は驚いてわけを執拗に聞いたが、何もしゃべらない。

それが由香里の生活が暗転する始まりであつた。この頃から由香里は、私ばかりか妻と話すことも嫌い出し、私たちが干渉すればするほど親を避け始めたのである。

そして、学校から帰る時間も遅くなり、家へ帰れば電話ばかりかけていて、友だちのことなどいっさい話さなくなつてしまつた。だれにでもある反抗期のせいだと思つてみたりもしたが、親の心配をよそに、一度走り出した由香里を、私たちは止めることはできなかった。

家出、登校拒否、転校、補導、シンナー、お定まりのように加速度的に落ちて行く。私たちは怒り悲しみながらも、ただ呆然と由香里の行動とともに流されていた。

これまで由香里は何度家を出たことだろう。数えればきりが無い。その度に私と妻は警察に保護願ひを出した。その何回目かのときは、妻は警察の人に「親が悪い」と怒られて、保護願ひをつき返されたこともあつた。

私たちは、由香里が家を出ると探し歩いた。私は由香里を探して原宿を一晚じゅう歩いたこともあつた。無性に腹が立つた。

(今は夜中だぞ。お前たちがうろろする時間じゃないんだ)

と、群がる若者たちにやつ当りをしながら、由香里の姿を求めて街を歩いた。由香里とまちがえて女の子の顔をのぞき込み、

「なによ、このおじさん」

と、はきすてるように言われたこともあった。少女にちょっかいを出す中年男に思われたにちがいない。

辛くて情けない日が続いた。もう夏休みは終わり、二学期が始まっていた。

その矢先のことであった。由香里は虎の門病院へ入院したいと言い出した。シンナーからぬけ出したいというのだ。

私たちは、その変化に驚いた。それまでも由香里は何度か学校へ行きたいということを、自ら言っている。親が眉をひそめるような行動をしていながらも、常に由香里の心は揺れ動いていたのだ。

翌日、由香里は虎の門病院へ入院した。九月九日から三十日まで、由香里は精密検査を受けるながら病院にいた。

私たちは、それで由香里が精神的にも肉体的にも立ち直ってくればと、神にも祈るような思いで、退院した由香里を家に迎えた。

だが、登校したのは二日だけで、また由香里は元の状態に戻ってしまった。由香里が学校へ

行っても、自分の居場所がないという絶望感を、私たちは痛いほどわかっていても、もうどうしてやることもできなかった。私たち親子三人は、先が見えない真暗なトンネルの中へ入ってしまったのだ。

その私たちの窮状を知って、虎の門病院の吉原先生、鵜沢先生が心配して下さり、鵜沢先生のご紹介で、警視庁の少年第一課に、竹江さんを訪ねることになったのである。

第一の課題

受付で鵜沢先生からの紹介状を見せると、警視庁という厳めしい場所には似つかわしくないきれいな女の人が、すぐに竹江さんに連絡をとってくれた。

「これに、お名まえ、ご用件を書いて下さい」

と出されたカードを見て、私が用件のところは何と書いたものかと迷っていると、横から妻がそのカードをとり、「子どもの相談のこと」と素早く書いてくれた。妻の方が落ち着いていた。受付の女性は、

「これをつけて一階の右手の少年一課へどうぞ」

と言って、胸につける大きなバッジを渡してくれた。

にこやかな微笑を湛えたその女性の顔を見ながら、この人は、私のことをどう思っているのだろうかと思うと急に恥かしくなつて、私は妻の陰に隠れるようにして、入口のところにいた大勢の人たちを意識しながら中へ入つて行つた。

少年一課は、閑散としていてのどかな感じがえした。私は相談者でこつた返している様子を想像していたが、待合室には中年の女の人がひとり座っているだけであつた。その女性は、私たちが入つて行くと、視線を合わせないようにして横を向いた。私にはその気持が手にとるやうにわかつた。私も、かしこまって妻の脇に座つてうつむいた。

私たちの番が来て、中の面談室の一室に入つた。テーブルと椅子が置いてあるだけの小さな部屋だが、壁は明るく、じめじめした感じはなかつた。

警視庁少年第一課少年相談室、心理鑑別技師、竹江孝という名刺をいただいて、私と妻は竹江さんの前に座つた。

小柄だが姿勢がいい竹江さんは、誠実感があふれ、おだやかな中にも厳しさを秘めた表情で私たちを迎えてくれた。

竹江さんは、ノートを開いてペンをとり、

「どうぞ、これまでのことを、どんなことでも結構ですから、できるだけくわしくおっしゃつ

て下さい」

と、静かな口調でおっしゃった。

私と妻は、三十分ほどかかって、由香里と私たちのこれまでの経緯を、思い出すままにお話しした。

私は、説明の不備を妻に正確に補ってもらいながら、仔細を報告した。

竹江さんは私と妻の話を聞きながら、ほとんど手を休めずに、克明にメモをされていた。話し終わった私たちに、竹江さんは一言、

「いじりすぎましたね」

と、低い声で言われた。

いじりすぎる、いじりすぎるということはどういうことなのか、私は竹江さんに問い返そうと思ったが、なぜか声にならなかった。

瞬間、由香里が非行に走り始めてからの半年間のことが頭をよぎった。家出、ボーイフレンドのこと、友だちの万引きのこと、何回も呼び出された警察のこと。そして、そのたびに怒り、あるときは殴り、あるときは哀願し、妻といっしょに泣いて来たそれまでのことが……しかし、親が一生懸命になればなるほど、由香里と私たちの距離はどんどん離れて行った。

（おれたちが一生懸命にやったことが、いじりすぎたということなのだろうか）

私の胸の中は錯綜していた。

竹江さんは、黙って席を立って隣の部屋へ行き、紙片にメモをしたものを持って出て来られた。

「これを今日から守ってもらいます。難しいかもしれませんが、これができなければ治療はできません」

と言って、そのメモを私に渡された。

そのメモには、次のようなことが書かれてあった。

一、子どもと話し合いをしてはいけない。

（親の方から絶対に話しかけてはいけない。子どもの方から話しかけてきたら、愛情を持って相づちだけを打つ。意見を言うてはいけない）

二、子どもに交換条件を出してはいけない。

相手の条件も受け入れてはいけない。

三、他人を巻き込んではいけない。

（どのような悪い友だちだと思っても、その友だちやご両親のところへ抗議したり、また、電話をかけたりしてはいけない）